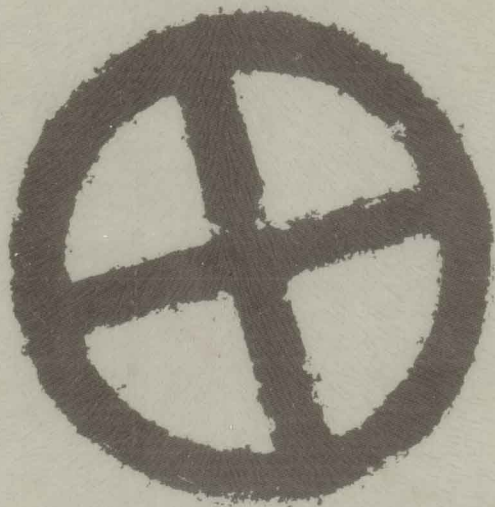
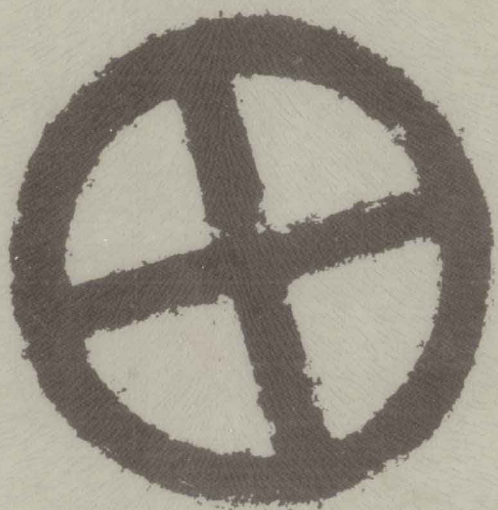




西郷隆盛 第十八卷

雪花の巻

書名	西郷隆盛 雪花の巻
著者	林 房雄
定価	六五〇円
発行所	徳間書店 東京都港区新橋四の一〇
発行者	徳間康快
発行日	昭和四十四年十一月十五日 初刷
印刷所	図書印刷株式会社
製本所	大口製本印刷株式会社
製函所	岡本紙器製作所

乱丁、落丁ありましたらおとりかえいたします

林 房雄©

林房雄

西郷隆盛

第十八卷 Ⅱ 雪花の巻

西
鄉
隆
盛
／
目
次

雪花の巻 * * * 目次

第一章 明治元年 * * * 9

第二章 越の山風 * * * 30

第三章 戦陣晩秋 * * * 52

第四章 雪嵐 * * * 76

第五章 南の春 * * * 105

第六章 賞典と位階 * * * 136

第七章 奇兵隊反乱 * * * 155

第八章 王家の衰弱 * * * 181

第九章 迎賓館 * * * 201

第十章 御親兵 * * * 226

第十一章 築地梁山泊 * * * 240

年表 * * * 259

挿絵・三井永一／装幀・上口睦人

雪
花
の
巻

第一章 明治元年

暑い日がつづく。岩雲の固い、風の死に絶えた午後は、ひる寝もできないほどの蒸し暑さであった。鹿兒島の城下を遠く東にはなれた日当山ひなたざきの温泉村でも、夏七月の炎暑からのがれることはできなかった。

太陽が桜島の方角に沈み、稲田の上に川風が動きはじめるのを待って、西郷吉之助りゅうほうすけは竜宝家の離れの小部屋からはい出し、麻のかたびらの尻をまくって、天降川あもりの川原道を歩いた。いくらか涼しい。向う岸の国司岳の屏風岩が残照に映えているのが南画めいて美しかった。

青い流れの中ほどに立ちこんで、長い竿を動かしながら、だれかが夕釣りをしている。やがて、落ち鮎の季節か。

吉之助は川原の夏草をしいて腰をおろし、両膝を抱いて、釣り人の姿に眺め入った。

（ここには戦争はない。山は緑、水は青、農家のたたずまいは平和そのものだ、稲田の中には温泉もわいている。しかし、日本国中は戦争だらけだ）

苦笑がわいてきた。世俗の塵の外の風光と自然の中のがれて来て、なお戦争を忘れることのできない自分がおかしかった。

今年は正月の伏見鳥羽から、五月の上野彰義隊まで、戦乱にあって戦乱に暮れ、しかもまだ戦争はつづいている。彰義隊の抗戦は一日で鎮圧することができたが、戦火は東と北に燃えひろがった。江戸城を手におさめ、関東諸州の残敵を追い散らしてしまえば、会津藩は孤立し、東北地方はおのずから平定すると思つたのは、大きな見込みがいであつた。敵をあなどりすぎた、甘い考えであつた。会津を中心とする奥羽同盟と、長岡、米沢、庄内を主力とする北陸諸藩の結束は固く、守勢にまわつているのは官軍の方である。この勢いでは、徳川幕府が東北の地で息を吹きかえすという最悪の事態もおこりかねない。

西郷吉之助が薩軍の一部をひきつれ、藩主島津忠義を奉じて京都から鹿児島に帰つて来たのも、凱旋とはほど遠いものであつた。うちつづく戦争に疲労しきつて、使いものにならなくなった兵隊を国もとに送りとどけ、それに代る新鋭の部隊を編成して再出陣するためであつた。強力な援軍なしには打開できない戦況である。

しかし、出陣の準備ははかどらなかつた。まず新兵の訓練から始めなければならない。洋式新兵の主力は銃隊であるが、すでに訓練の終つたものは、すべて援軍として送り出されていた。参謀と将校も不足していた。伊地知正治、大山綱良、桐野利秋、大山巖は土佐の板垣退助とともに会津方面に、黒田清隆、吉井幸輔、村田新八は長州の山県有朋、前原一誠とともに越後方面に出陣している。砲術家の中原猶介も砲兵隊をひきいて関東から越後方面に転進したという。

まるで無から始める訓練であるから、時間と手間がかかつた。六月の中旬から始めて、七月も末の今日までかかつて、どうやら目鼻だけはついたものの、すべての責任を一身にひきうけた西郷吉之助

は二十六貫の巨体のすみずみまで疲労をためて、くたくたになってしまった。

湯治をすすめてくれたのは、妻の糸子と弟の小兵衛であった。留守番役の漢詩の先生川口雪蓬老人

*

も笑いながら言った。

「万軍に将たる者が、わが身の不養生で、戦わざる先にへたばるのは、下策中の下策だと孫子にあらうだな」

「そんなことは書いてない」

「孫子が言わなかったとしても、正論じゃな。顔色がわるいぞ。どこかの温泉に寝ころんで、また下手な魚釣りの詩でも作ってくることだな。添削はわしがひきうけた。……誰か知らん高人の別天地、一竿風月、秋江に釣るか」

その気になって、下男の熊吉だけをつれ、日当山の竜宝伝右衛門の家にやって来たのが三日前の夜であった。伝右衛門はこの村の村名主にあたる家柄で、学問を好み、加治木領の平田学派との交りも深いので、吉之助のいい話相手であった。先年、坂本竜馬夫婦を預けたのも、この家である。

「あれから、もう一年でございますな。坂本さんとはんだことになりましたが、あなたは御無事で……」

「全く、思いがけないことばかりの一年だった」

「京都と江戸では、だいぶ危ない日にお会いになったそうですな。手傷をおうけになったと聞きまし

たが……」

「手傷は弟の信吾（従道）の方だ。伏見鳥羽の合戦で首筋を射抜かれ、一時は命もあやぶまれたが……」

「ほほう、それは……」

「イギリス人のウイリアム・ウイリスという名医の手術で今は馬のように元気になった。いっしょに鹿児島まで帰ってきております」

「それは何より。……今度は、ごゆっくりなさいますか」

「いや、兵隊の用意がととのい次第、また駆けのぼらねばならぬ。弟の吉次郎も小兵衛も従弟の大山巖もどこかで戦っている。私だけがのんびりしているわけにもいかん」

「あなたのためというわけではありませんが、小さな離れを新築いたしました。ちょうど間にあつてよかった。どうぞ、ごゆっくりしてってください」

まだ畳も新しい離れの小部屋で、まる一日ほど眠りとおして、どうやら人心地がついた。その次の日は、空が晴れすぎて、ひる寝もできないほどに暑苦しかった。夕暮れを待つて、川原道にはい出てきたのだが、（ここは平和だ）と思ったのは、ほんの一瞬で、頭の中はすぐに戦争のことではいっばいになったのだから、われながら因果な身の上だと苦笑がわいた。

川原の小石を鳴らして、荒っぽい足音が近づいて来た。家僕の熊吉とはちがう。

ふりかえると、ザンギリ髪を額にたらした旅姿の大きな男であった。

吉之助は思わず立上がつて、

「新八、おまえか！」

越後方面の戦場にいるはずの村田新八であった。

額を汗で光らせた若侍はあわてて頭を下げたが、表情をこわばらせて、何も言わない。

「新八、なんの用だ」

「はあ、大総督府の御命令を持てまいったのであります」

*

竜宝家の離れにひきかえし、熊吉に酒と鯉のアライを用意させて、村田新八の報告を聞いた。

越後方面の戦況は容易ならぬ形勢になっていた。はっきり言えば、薩摩と長州を主力とする征討軍は、長岡城の攻略に失敗して、大損害をうけ、敗軍の一步手前まで追いつめられている。

「長岡藩には河井継之助という人物がいたのです。この人物の恐しさを長州の山県参謀もわが藩の黒田参謀も知らなかったのが、そもその間違いでありました」

村田新八はくやしそうであった。

「実は私も河井がそれほどの人物だとは思っていませんでしたが、学問は和漢洋に通じ、長崎では外人について砲術を学び、藩の重役としては物心両方面にわたって大いに治績をあげた傑物であったことが、あとでわかりました。河井は初め会津に味方することも征討軍に従うことも、長岡藩のためにも日本国のためにもならぬと考えていたようです。すなわち中立主義でありまして、尊皇佐幕の外に立つ方針を堅持し、もっぱら藩政を改革し、人材を登用し、武備を充実しておりました。オランダ商人のスネルという男から、ガットリング機関砲をふくむ最新式の武器を大量に購入していたことも、

実は私どもは知らなかったのであります」

「ガットリング砲か」

「一分間百八十発の速射砲であります。幕艦回天丸は一門だけそなえているようですが、河井がいち早くこの砲を買いこんだのは尋常でない着眼であります。それだけの用意があったので、河井は会津と桑名の軍使が長岡藩に迫って奥羽同盟への加盟をすすめた時にも自信をもって拒絶し、またわが軍に対しても出兵と献金をこわつたのであります。わが軍の先鋒は、五月の初め、長岡城から四里のおじや小千谷まで進出いたしました。その時、河井継之助は白らわが本営に乗りこんで来ました」

「ほほう」

「ここで我々は重大失敗をやりました。河井は理をつくした嘆願書を提出して、長岡藩の苦しい立場をのべ、今は世界万国が対峙して富強を競っている時代であるから、日本国内で内争をおこすべき時ではない、官軍がしいて武力を加うことをせず、しばらく時間をかしてくれたら、自分はおならず藩論を一定し、奥羽列藩を動かして無用の抗戦をやめさせてごらんといれると訴えたのですが、土佐の軍監岩村精一郎という小僧が威張りかえって、嘆願書も読まず、軍服の袖にとりすがって訴える河井を頭ごなしにどなりつけて、本陣から追い出してしまったのです」

「小僧といったな」

「まだ二十二歳の小僧です。その席には長州の白井小助やわが藩の淵辺高照もいたのですが、彼らも河井という人物を知らなかったのです。本陣の慈眼寺を追ひ出された河井継之助は、その夜おそくまで寺の門前にたたずみ、再度の面会を求めたそうですが、軍監の肩書を笠に着た岩村は兵士に命じて

追いかえしてしまいました」

吉之助は煙管きせるの吸口を右の目のまわりにおしあて、ぐるぐると輪を描きながら、黙々と聞き入っている。思いあぐんだ時の癖である。

村田新八はつづけた。

「これでは、河井継之助も長岡藩士も怒ります。怒らなかつたら不思議だ。全藩は火の玉のように燃え上がり、河井自ら陣頭に立って抗戦しはじめたのだから、山県参謀も黒田参謀も手の打ちようがない。尾張藩と上田藩を主力とする官軍は、会津、桑名の兵を撃退して長岡城から三里ほどの榎峠に布陣していましたが、河井は五月十日の朝、この峠を逆襲して、一挙に占領してしまいました。山県参謀は軍監の時山直八とともに奇兵隊をひきいて小千谷の本陣に到着しましたが、途中で榎峠の方向にげししい銃砲声を聞いただけで、戦況については何も知らなかった。小千谷の本陣ではちょうど夕飯の時刻で、岩村軍監以下の諸隊長は寺の本堂に黒塗の本膳をならべ、坊主や町の娘たちに給仕させて、まるで法事のお客のようにのんびりやっている。山県参謀は立腹し、岩村をどなりつけて、斥候を出してみると、榎峠はすでに敵軍の手中にあることがわかって、大騒ぎになりました」

「黒田は何をしていた」

「柏崎の本営におりました。私もそこにいましたので……」

「敵の奇襲に気がつかなかったという点では、黒田もおまえも同罪ではないか」

「はあ、しかし……」

「弁解はいらぬ。それで、山県参謀はどうした」